

NIHONJIN NO WASUREMONO
日本人の忘れもの
 第2部 忘れもの 29

寄り添う「個性」

総譜を眺めると、それは曼陀羅絵のように幾何学模様の集合体が織りなす神秘的な絵図のようです。その幾何学模様は万国共通の解き方があり、暗号を解読すると、空には心を動かす波動が表れ「音楽」になります。ただ機械的にこの暗号を解くだけなら何人が波動を作り出しても、全く同じ色、匂い、表情の波が作りだされるはずなのに、何故か謎解いた人物によってその波動の表情は全く違う。その理由は、その暗号たる幾何学模様を繋ぐ線の描き方は千差万別であるが故で、その音符を繋ぐ線の色、太さ、形を人々は「個性」と呼ぶのです。

先人の個性を尊重し、引き受けること

芸術の世界では、この「個性」は尊重され、類のない新しい文化を作り出す原動力になります。他人から尊重していただく私たちの個性。逆に先人、隣人、友人たちの、こちらから重んじらるべき個性。ただ現代は、自らの個性の押し売りに終始し、となりでは笑む人々の個性をながしきろにしているように思えます。「個性」の線は時間軸で図る「縦の線」と現在の時間を共



広上淳一
 指揮者

急ぎ足の現代は、他の個性との関わりを捨て、自我を主張することに終始する殺伐社会を生みだします。

有する隣人との「横の線」があります。音楽を表現するとき、その幾何学模様の絵図の上に先人が繋ぎ続けた縦軸となる個性が生む背景や感情、無論、音符絵図を描いた先人の「個性」を最低限尊重し引き受けなければ、現代の私たちが持つ個性などただの無礼な振る舞い、神秘的な絵図に泥を塗るだけです。横軸たる現代個性の集合体オーケストラ。それぞれがぶつかり合うこともあるのですが、隣人の個性を尊重し関わり合うことで、同じ方向に進むと、想像以上の波動たると、想像以上の



オーケストラは隣人の個性を尊重し関わりあうことで、同じ方向に進むと、想像以上の波動たると音楽を作り出す。

波動たると音楽を作り出します。現代は「時」は速く、「間」が失われている。楽譜には個性の関わり方が上手に描かれていて、尊重し合う指針となっているのです。縦軸で時空を超えた先人の個性を敬い、その意思を継ぐ。横軸で大小音域音圧の違う楽器同士、個性同士の互いを尊重し、邪魔をすることなく譲り合う。幾何学模様の絵図は、本来個性を重んじる人々が目指す理想社会の縮図だと感じています。

現代の時間は、「時」は速く、「間」が失われています。それは、近年では「待つ」ということを忘れ、「待つ」時間の中に生まれる「想像する心」も失われてしまっています。想像は現在を読み、対人の存在や距離感を感じることになる瞬間にはかならないのですが、急ぎ足の現代は他の個性との関わりを捨て、自我を主張することに終始する殺伐社会を生みだします。これは、他の個性と同じ時間を共有することから生まれる「発見」や「共感」すら放棄している世界です。

昔の街かどでの一コマ。打ち水をすするおばさまが通りがかったお隣さんに「どちらへ？」と声をかけますと、お隣さんは迷わず「ちよつとそこまで」と一言。明解ではないこの隣人の答えにでも、おばさまはすべてを含んだ微笑みを浮かべ「お気をつけて」とやさしく答える。この笑い話のようなこのたわいない会話の中には、些細な関わりでも心の目で他人を見つめる、今失われつつある「個性」が寄り添い交差する姿があるのです。

●ひろかみじゅんいち
 1958年、東京都生まれ。東京音楽大学。84年第1回キリルコンドラシ国際指揮者コンクールで優勝。ノルディンギン交響楽団やリブルク交響楽団の各首席指揮者、日本フルハーモニー交響楽団正指揮者、コロンバス交響楽団音楽監督を歴任。東京音楽大学教授。2008年4月からは京都市交響楽団常任指揮者を務める。

戦後、日本人は物の豊かさと引き換えに大切なものを忘れてきたのではないだろうか。日本人が忘れつつある価値観が今も生き続ける千の都。京都から温故知新の知恵を発信する。(毎週日曜日に掲載します)

きょうの季寄せ (一)

舟慕ふ
 淀野の犬や
 枯尾花

几童



淀川のかつて水運・舟運の盛んだつたことを窺わせる。舟にいる人と川の辺の枯薄原にいる犬との親密な関係が伝わってくる。日頃から餌を与えたり与えられたり、馴れ親しんでいるからこそ、こうして川と陸とに離れてしまうと、犬も淋しく舟を追っかける。夏目成美に「天鳴ゆる昼も淀野のしぐれ哉」がある。(文・岩城久治)

「きょうの心伝」

木村哲夫
 NPO法人節草の会(京都市下京区77感行儀悪いえ)

「そんなことしたら、行儀悪いえ人さん見たはるえ」「神さん仏さん粗末にしたら、あかんえ、罰あたるえ」の言葉を日頃、祖父母などから言われ続けてきた、京生まれの京育ち。実はこれらの言葉が、嫌いで嫌いで仕方なかった。

しかし、70代になって、京都検定の受験勉強をするうちに京都の良さを感じ、その良さと何かを求めていたうちに、言われてきた言葉が甦ってきた。多くの人が、折り、願って、思いを込めて建立した寺社、そしてそれらを数百年、数千年の長い間守り残してきた場所は、聖域であり、これらの寺社を大切に、最低限のマナーを持って拝観することを意識した。残念ながら、昨今は多くが観光寺院となり、観光客が参拝ではなく観光として見物する念には「行儀」も「神仏への畏敬の念」の気持ちも、全く感じられなくなっている。若者は無論のこと、大人もまた、これらの言葉を忘れ見物する姿を見て愕然とする。今日この頃である。

「きょうの心伝」募集

●あなたの思う「日本人の忘れもの」は何ですか？ 暮らしの中で忘れてはならないと思う日本人の心の系譜や、伝えたい京都に残る心遣いなどをお寄せ下さい。京都新聞社で連載、添削する場合があります。原稿は返却いたしません。タイトル(12文字以内)と本文(400文字以内)、郵便番号、住所、氏名(匿名は不可)、職業、年齢、電話番号を明記し、〒604-8577 京都新聞COM「きょうの心伝」係まで。
 E-mail: wasuremono@nhk-kyoto-npc.jp
 Fx: 075-26212200

●日本人の忘れもの第2部のバックナンバーは、京都新聞ホームページでいただけます。
http://kyoto-nhp.jp/kyo_inf/nw/

日本人の忘れもの。

この美しい国ではぐくまれた宝ものがあります。遠い祖先が積みあげてきた技。磨きかけた暮らしの知恵と作法。花と語らい。鳥と遊び。風をたのしみ。月と戯れ。その花鳥風月に命を見つけ神が宿ると信じて。草木国土悉皆成仏のころで。畏怖と親しみを自然に抱いた日本人。自然をとら感じ合うためのもてなしや遊び心など。ゆたかな文化を創造してきた。ここ、京都から日本に。伝えたいことがあります。



混迷の現代をさまよひ続ける「日本」。将来の指針を「京都のこころ」に求め、わが国各分野第一線の英知が示す提言エッセー「日本人の忘れもの」京都「こころ」に。第一部連載を収録。二月下旬発売予定。予価一八九〇円。

主催：「日本人の忘れもの」キャンペーン推進委員会(京都新聞社、京都商工会議所、社団法人京都市観光協会) 企画協力：株式会社日商社

